九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

“You may deem me romantic” : メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』における“romantic”

鵜飼, 信光
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/4772794

出版情報：文學研究. 119, pp.51-68, 2022-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

“You may deem me romantic”
── メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』における “romantic”*

鵜　飼　信　光

Mary Shelley の *Frankenstein or the Modern Prometheus* (1818) は、私財を投げ打ってロシアから船を出し北極探検をしている28歳の青年ロバート・ウォルトンが、一匹だけになった犬と犬ぞりとともに氷の破片に乗って漂流していたヴィクター・フランケンシュタインを救出し、彼の語る来歴を記録し、ヴィクターの死後、怪物との短い遭遇のエピソードを記して終わるという、「枠物語」の構造になっている。この「枠」の部分の語り手ウォルトンは、旺盛な科学的探究心をヴィクターと共有しているだけでなく、怪物との共通点においても重要な人物である。孤児である彼は妹か姉であるマーガレット（物語が始まる時点で彼女は既婚でサヴィル夫人となっている）とともに善良な叔父トーマスの世話になっていたが、その叔父が二人の教育をなおざりにしたため、彼は14歳まで独学で学び、叔父の蔵書が発見のための航海記ばかりであったため、そのような航海記を日夜読み耽るのが彼の勉強だった。怪物もまた、田舎家で壁の隙間ごしにドゥ・レイシー家のやりとりから独学で言葉と文字を学び、森の中で拾ったゲーテの『若きウェルテルの悩み』、ミルトンの『失楽園』、プルタルコスの『対比列伝』という限られた書物だけで知識を得ていた。ウォルトンには孤児であるとは言えマーガレットという家族がいる、という点で完全に天涯孤独な怪物とは大きな違いがあるが、近所の子供とも遊ばず、学校へも行かず孤独に育ち、友を持つことを渇望している点が、怪物と共通している。怪物は友を持ちたいという渇望を裏切られたために人類に危害を加え始めるので、作品において、友を持つことへの渇望は、とても重要な意味を持つが、ウォルトンはその渇望をマーガレットへの作中二番目の手紙の中で次のように記している。

But I have one want which I have never yet been able to satisfy; and the absence of the object of which I now feel as a most severe evil. I have no friend, Margaret: when I am glowing with the enthusiasm of success, there will be none to participate my joy; if I am assailed by disappointment, no one will endeavor to sustain me in dejection. I shall commit my thoughts to paper, it is true; but that is a poor medium for the communication of feeling. I desire the company of a man who could sympathise with me; whose eyes would reply to mine. You may deem me romantic, my dear sister, but I bitterly feel the want of a friend. I have no one near me, gentle yet courageous, possessed of a cultivated as well as of a capacious mind, whose tastes are like my own, to approve or amend my plans. How would such a friend repair the faults of your poor brother! I am too ardent in execution, and too impatient of difficulties. But it is still greater evil to me that I am self-educated: for the first fourteen years of my life I ran wild on a common, and read nothing but our uncle Thomas's books of voyages.（19, Letter II ページ数は Penguin 版による。以下同様）

［乗組員に信頼できる勇敢な男たちを雇うことができたが］しかし、私には今まで満たすことのできたことのない欠乏があります。その対象の不在を私は今、最も深刻な不運だと感じます。私には友達がいないのです、マーガレット。成功の情熱で輝いている時、喜びを分かち合える相手がいません。失望に襲われた時、誰も失意のうちにある私を助けようとしてくれません。紙に考えを書き付けることはできますが、それは、感情を伝え合うには、哀れな媒体です。私は、共感してくれる人、その目が私の目に応えてくれる人と付き合いたいのです。姉さんは私をロマンティックだと見なすかもしれませんが、私はひどく友達の必要を感じているのです。身近には、穏やかだが勇気があって、広々としているだけで

> なく教養もある精神を持っていて、好みが似ていて、私の計画をいいと言ってくれたり悪いところを直してくれたりする人が誰もいません。そんな友達はあなたの弟の欠点を直してくれるでしょう！私は事を行うのに熱心すぎ、困難に出くわすと我慢ができなさすぎます。しかし、私のもっと大きな不運は私が独学であることです。十四歳になるまで私は、囲いのない共有の荒れ地を野蛮に走り回り、トーマスおじさんの航海の本ばかり読んでいたのです。

このような渇望を抱いていたため、ウォルトンはヴィクターを救助してその人柄に触れた時、ヴィクターの中に「穏やかだが勇気があって、広々としているだけでなく教養もある精神を持っていて、好みが似ていて、私の計画をいいと言ってくれたり悪いところを直してくれたりする人」という、理想の友人を見出したように思い、その喜びに圧倒されて、ヴィクターが語る来歴の中に問題があってもそれに気づかず、彼をただ賛美し続けることになる。ウォルトンがそのように鋭敏さを欠き、盲目的であることは、ヴィクターが聞き手に遮られることなく語りを続けるために必須でもあった。上の引用は、そのようなウォルトンの鋭敏さの欠如を生じさせる要因を示す箇所としても、怪物と共通する友を持つことへの渇望を示す箇所としても重要だが、本稿ではその一節にある “romantic” という語に着目したい。

上の引用の中で、「ロマンティック」という語は、ウォルトンが、友という存在が与えてくれる恩恵を自分が過剰なまでに理想化して思い描き、友を得ることへの期待に心を高揚させすぎている、とマーガレットに思われるかも知れない、と言う文脈で使われていて、より一般的には、ある事柄を非常に理想化して、それに酔いしれるような傾向を「ロマンティック」は指していると言える。しかし、『フランケンシュタイン』は、何かをそのように過剰なまでに理想化しそれへ惑溺することがはらむ問題を執拗に告発する作品でもある。メアリーの夫シェリーがその中に含めて言われる「ロマン派」の “romantic” と上の引用中のそれは当然全く同じというわけではないが、高邁

な理想に情熱を燃やすという心情に、猜疑の目を向ける『フランケンシュタイン』を、他ならぬメアリー・シェリーが書いたことは興味深い。人類による制御が効かなくなり、科学技術が暴走する危機を予見した作品でもある『フランケンシュタイン』を、本稿では、「ロマンティック」に理想に舞い上がる心情への批判という観点から、考察することを試みたい。

I

『フランケンシュタイン』において、高邁な理想に情熱を燃やす、一見気高い心情に猜疑の目が向けられていることは、ウォルトンが自分の北極圏探検が人類にもたらす恩恵と考えるものが、ヨーロッパによる東洋の植民地化に役立つような航路発見を含んでいることに見て取られる。彼は第一の手紙でマーガレットに、これから向かう北極圏の美しさの想像や自分がなす発見の意義を熱く語りながら、次のように述べる。

> But, supposing all these conjecture to be false, you cannot contest the inestimable benefit which I shall confer on all mankind to the last generation, by discovering a passage near the pole to those countries, to reach which at present so many months are requisite; or by ascertaining the secret of the magnet, which, if at all possible, can only be effected by an undertaking such as mine. (16, Letter I)

> しかし、これら［天体観測の逸脱的データを説明できるなど］の推測がすべて間違いだと仮定しても、現在到達するのに何ヶ月もかかる国々へ北極付近を通る航路を発見することによって、また、仮にも可能なら、私の企てのような企てによってのみ遂行可能な、磁力の秘密の解明によって、私が最後の世代に至るまで全人類に与えるだろう、はかりがたい恩恵に異議を唱えることはできません。

北極圏探検によって東洋への近道となる航路を発見しようとすることは、ずっと以前から試みられてきていて、ウォルトンだけに特有のものではないが、彼がそうした探求者たちの列に自らを加えることによって、ヨーロッパによる世界の植民地化の加担者となろうとしていることを、作品は提示する。

もっとも、その箇所で東洋への近道となる航路の発見が、東洋の植民地化を加速させるというネガティヴな事柄と明示的に結びつけられているわけではないが、それらが結びつけられているだろうことは、『フランケンシュタイン』の二つの箇所で植民地化が否定的に捉えられていることからうかがえる。その一つの箇所は、ヴィクターが、心の平静を失い、家族への愛情を弱めるような何かへの没頭は、避けられるべきものであり、それを避けなかったから、急速な植民地化や、植民地の帝国の破壊につながったと諭す場面である。

> A human being in perfection ought always to preserve a calm and peaceful mind, and never to allow passion or a transitory desire to disturb his tranquility. I do not think that the pursuit of knowledge is an exception to this rule. If the study to which you apply yourself has a tendency to weaken your affections, and to destroy your taste for those simple pleasures in which no alloy can possibly mix, then that study is certainly unlawful, that is to say, not befitting the human mind. *If this rule were always observed; if no man allowed any pursuit whatsoever to interfere with the tranquility of his domestic affections, Greece had not been enslaved; Caesar would have spared his country; America would have been discovered more gradually; and the empires of Mexico and Peru had not been destroyed.*（56, Vol. I, Ch. IV 斜字体筆者）

> 完璧な人間は平静で穏やかな精神を常時保持するべきで、決して情熱や一時的な欲望が平静さを乱すのを許すべきではありません。知識の探求もこの規則の例外だとは思いません。もしもあなたが専心する研究が、

愛情を弱めたり、いかなる混ざり物も混ざることのできない単純なそうした喜びへのあなたの好みを害したりするような傾向を持つのなら、その研究は確かに不法なもの、すなわち、人間精神に適したものではないのです。もしこの規則が常に守られたのなら、もし誰も、家族への愛情の静けさを乱すような何かの探求を許さなかったら、ギリシャ人は隷属させられることはなかったでしょうし、カエサルも彼の国を寛大に扱ったでしょうし、アメリカはもっと徐々に発見され、メキシコとペルーの帝国も破壊されなかったでしょう。

後ほど検討するように、ヴィクターには様々な問題があり、そのヴィクターがこういう立派なことを言うのは筋違いである、と言うべき面はあるが、それでも彼の言葉を通して、現地にとって急速で破壊的だった植民地化への批判が描かれていることは注目に値する。

作品中で植民地化が否定的に描かれているもう一つの箇所は、ドゥ・レイシー家でアラビア女性サフィーが、一家の若い息子フェリックスから The Comte de Volney の *Ruins of Empires* という当時よく知られていた歴史哲学のエッセーを用いて、歴史を教えられる場面である。怪物はそれを聞きながら、植民地化されたアメリカ大陸の原住民の運命にサフィーとともに涙する。

I heard of the slothful Asiastics, of the stupendous genius and mental activity of the Grecians, of the wars and wonderful virtue of the early Romans —— of their subsequent degenerating —— of the decline of that mighty empire, of chivalry, Christianity, and kings. *I heard of the discovery of the American hemisphere and wept with Safie over the hapless fate of its original inhabitants.*（122, Vol. II, Ch. V 斜字体筆者）

私は怠惰なアジア人、ギリシャ人の途方もない天才と精神的活動、初期ローマ人の戦争と素晴らしい美徳 —— 彼らのその後の堕落 —— その大帝

国の衰退、騎士道、キリスト教、諸国の王について聞いた。私はアメリカの半球の発見を聞き、現地に住んでいた者たちの不幸な運命を聞いて、サフィーとともに泣いた。

ここでもヨーロッパ人の行った破壊的な植民地拡張への批判が織り込まれている。筋肉がそのまま見えておぞましい怪物の身体も、皮膚が覆っているところは黄色く、髪も黒いと描写されていて（58, Vol. I, Ch. V）、アジア人的な特徴が与えられている。そういう怪物が、外見から無条件に迫害される、という設定にも、非ヨーロッパへの迫害の不当さへの告発が織り込まれていると考えられる。

このように『フランケンシュタイン』には植民地化への批判が織り込まれていて、ウォルトンの北極圏探検の東洋への航路発見という目的も、ウォルトン自身には自覚がないものの、作品としては植民地化を加速させるものとして捉えられていることが読み取られる。こうした負の要素を多分にはらんだ「理想」の実現に邁進するウォルトンが、一時期詩人になることを志望していたという設定にされていることも注目に値する。ウォルトンはマーガレットへの第一の手紙で「これらの［達成された探検が人類にもたらす恩恵についての］想いは私がこの手紙を書き始めた時の［失敗して死ぬかもしれないという］動揺を追い払ってくれました。私は自分を天へと高めるような情熱で心が輝くのを感じます」（16, Letter I）と書いていて、「天へ高められる」ような高揚感を自らの科学的野心に感じていることが見て取れるが、14歳の時初めて詩人たちの作品を読んだ時にも、ウォルトンはその詩人たちの感情がほとばしり出た詩文が彼の魂を魅了しその魂を「天へと高めた」（16, Letter I）と述べる。その感動のせいで、それまでの発見のための航海への情熱が冷め、ウォルトンは「ホメロスとシェイクスピアの名がそこで神聖なものとされている寺院に自分も一つの壁龕を得よう」（16, Letter I）とするが、一年の詩作の後に失敗し、失望にひどく苦しむことになる。しかし、ちょうどその時にいとこの財産を相続し、彼は再び発見のための航海へと心を向けるよう

になった。

ウォルトンはホメロスとシェイクスピアの名を挙げるだけで、ロマン派詩人に言及するわけではないが、彼が詩人を志望していた時期を回想する一節でも「ロマンティック」という語を使っているのを見てみたい。

> Now I am twenty-eight and am in reality more illiterate than many schoolboys of fifteen. It is true that I have thought more, and that my day dreams are more extended and magnificent, but they want (as the painters call it) *keeping*; and I greatly need a friend who would have sense enough not to despise me as romantic, and affection enough for me to endeavor to regulate my mind. (20, Letter II)

> 今私は28歳で、実のところ、15歳の多くの学生よりも読み書きの能力は低いです。確かに私はより多く考え、私の白昼夢はより広大で壮麗ですが、それらは（画家たちが言うところの）構図の調和を欠いているのです。私には、私をロマンティックだと軽蔑しないだけの十分な分別と、私の精神を規律正しく制御するよう努力してくれるほどに十分な愛情を私に感じてくれる友がとても必要なのです。

友を得ることを熱烈に望むことを「ロマンティック」だと思われるかも知れない、とウォルトンがマーガレットへの手紙で書いていたことは先に見たが、上の引用箇所でもウォルトンは、自分の詩的志向が「ロマンティック」なものとして軽蔑されることへの危惧を示している。どちらの文脈でも「ロマンティック」は批判のために使われる語で、ウォルトンは自分はそうではない、と言うつもりでいる。しかしまた同時に彼は、自分の志向が「ロマンティック」なものとして批判される可能性を自覚していることも示している。

ウォルトンの詩的志向はそのように「ロマンティック」と見なされる可能性のあるものだが、詩作品に天へ「高め（lift）られる」ように感じた彼の感

性は、科学的野心に天へ「高め（elevate）られる」感性と似通っている。そして、その科学的野心は、植民地主義の片棒を担ぐことになるような負の側面を併せ持っていることが描かれる。彼はまた、「ロマンティック」と見なされかねないほどの熱烈な友への渇望のせいで、ヴィクターの語りがはらむ問題に対し盲目的になり、それを無批判に書き留める。「ロマンティック」という語で表されかねない過剰なほどの理想化と、その高邁な理想への邁進に酔いしれるような心情に『フランケンシュタイン』という作品は批判的な視線を向けるのである。

II

『フランケンシュタイン』には、もう一人、ヘンリー・クラーヴァルという熱烈な詩的志向を持つ人物が登場する。ヴィクター・フランケンシュタインの家族は、ジュネーヴから３マイルほどの田舎に引きこもり、ヴィクター自身も群衆を嫌って、少数の友人とだけ交流したが、その一人がクラーヴァルだった。彼はジュネーヴの商人の息子で、「企てと苦難を愛し、危険すらもそれ自体のために愛し、騎士道とロマンスの書物を耽読し、英雄的な歌を作り、魔法と騎士的冒険の物語を数多く書き始め」（39, Vol. I, Ch. II）るような人物だった。ヴィクターが関心を向けるのがもっぱら「世界の自然科学的な（physical）秘密」であったのに対し、「クラーヴァルは、物事の言わば精神的な関連に専心した。人生の多忙な舞台、英雄の美徳、人間の行動が彼のテーマで、彼の希望と夢は、私たちの種の勇敢で冒険的な恩恵を施す人物として、その名が物語に記録されるような者の一人となることだった」（39, Vol. I, Ch. II）。

このように「独特な才能と空想を持つ少年」（39, Vol. I, Ch. II）だったクラーヴァルは、しかし、ヴィクターがドイツのインゴルシュタットの大学へ行く時には、商人である父に大学教育は不要だと止められ、二年後にやっと大学入学を許される。彼がインゴルシュタットに着いたのはたまたま、ヴィクターが怪物を完成させた翌日で、彼は怪物創造後のショックで重病に陥っ

たヴィクターの看病を、怪物創造の事情を知らされないまま、献身的に行う。ヴィクターがウォルトンに語る言葉の中に「クラーヴァルの気高い精神」という句があるが、クラーヴァルの気高さは、たとえば、フランケンシュタイン家で養われていたエリザベスのヴィクター宛の手紙の一節から読み取ることができる。彼女は重病だと伝えられるヴィクターを心配し、長旅に耐えられないヴィクターの父に代わって自分がインゴルシュタットに行きたいが行けないことを悔やみ、ヴィクターの病床の世話が、「誰か、賃金だけが目当ての年老いた看護婦に託される」（65, Vol. I, Ch. VI）様子を思い描く。この一節から読み取られるのは、クラーヴァルが、自分が大学の授業に出る時間も犠牲にして献身的にヴィクターの看病を行いながら、フランケンシュタイン家には、自分がヴィクターの看病をしていることを伝えていない、ということである。伝えてしまえばフランケンシュタイン家が申し訳ないという気持ちから何らかの対処をすることになるが、それを避けるために、また、自らの思いやり深い行為を人に喧伝しないために、クラーヴァルはそれを伝えないのである。

クラーヴァルは後に、ヴィクターが怪物に約束した女性の怪物創造に必要な知識をイギリス人から教わりに行くのに同行するが、ストラスブールでヴィクターと合流し、船でライン川をロッテルダムへ下る道中、苦悩で意気消沈しているヴィクターとは対照的に、彼は持ち前の豊かな詩的感受性で、新たに見る景色に喜びを感じる。彼は後に、ヴィクターが完成間際の女性の怪物を破壊してしまったことに怒った怪物の復讐の一環として、怪物に殺されてしまうが、その死は、感受性豊かで、気高い精神と洋々たる前途を持った若者のただただ惜しまれる、不条理な死として描かれているように思われる。しかし作品は、この非の打ちどころのないように見える若者にも否定的な側面があることを描いてもいる。クラーヴァルの描写には「ロマンティック」という語は使われていないが、騎士道「ロマンス」を耽読した彼の将来の計画が、植民地化に加担することに他ならないことが描かれるのである。

> He was also pursuing an object he had long had in view. His design was to visit India, in the belief that he had in his knowledge of its various languages, and in the views he had taken of its society, *the means of materially assisting the progress of European colonization and trade*. In Britain only could he further the execution of his plan.（163-64, Vol. III, Ch. II 斜字体筆者）

> クラーヴァルは、彼が長いこと思い描いていた目的を遂行してもいました。彼の意図はインドを訪問することでした。自分のインドの様々な言語の知識や、インドの社会について自分が得ている見方が、ヨーロッパ人による植民地化の進展と、貿易を大いに助ける手段になると信じていたからでした。彼の計画をさらに推し進めるのは英国でしかできなかったのです。

スイスは植民地を持っていなかったので、クラーヴァルが自分の知識と能力を植民地化に役立たせるためには、イギリスなどの植民地保有国を通すことが必要になる。彼はヴィクターとのイギリス訪問で、そういう将来の計画の足がかりを築こうとする。上の引用の箇所は、1818年の作品の初版にはなく、1822年の夫 Percy の死よりもさらに後の、1831年の改訂版でつけ加えられたものである。詩的志向を強く持つクラーヴァルに上記のような否定的側面が新たに付加されたことには、ロマン派詩人たちへのメアリーの姿勢に、その年月の間に大きな変化が生じていたことを示唆している。[1]

ウォルトンの場合よりもはるかに明瞭に植民地化の片棒を担ごうとする意図が明白なクラーヴァルであるが、一方で、彼が愛していたのは東洋の平和的な詩だったことがヴィクターの言葉を通して描かれてもいる。彼はインゴルシュタットで療養中、クラーヴァルが研究していた東洋の詩を一緒に読んだことを次のように回想する。

I read merely to understand their meaning, and they well repaid my labours. Their melancholy is soothing, and their joy elevating, to a degree I never experienced in studying the authors of any other country. When you read their writings, life appears to consist in a warm sun and a garden of roses, in the smiles and frowns of a fair enemy, and the fire that consumes your own heart. How different from the manly and heroical poetry of Greece and Rome! (70, Vol. I, Ch. VI)

私はそれらの意味を理解するためだけに読み、私の労力は十分に報いられました。それらの詩の憂鬱な雰囲気は心を慰め、それらの喜びは心を高め、他のどの国の作家を研究しても経験したことがないほどでした。彼らの書いたものを読むと、人生は温かな太陽と、バラの庭と、美しい敵［女性］の微笑としかめ面に、心を焼き尽くす火［恋］の中に存在するように思われました。ギリシャとローマの男性的で英雄的な詩とは、何と違うことでしょう。

クラーヴァルは語学的な研究をしていたとはいえ、こうした「ギリシャとローマの男性的で英雄的な詩」とは違う、平和な東洋の詩を愛していたのだが、そのクラーヴァルも、自分の将来の展望となると、東洋語の知識を植民地支配に役立てることになってしまう。彼は、ヴィクターが完成間近な女性の怪物を破壊したことへの復讐として、怪物に殺されるのだが、迫害される非ヨーロッパ人を体現しているという怪物の象徴的意味を考慮すると、クラーヴァルの殺害は、植民地化される非ヨーロッパによる、ヨーロッパへの逆襲という意味合いを帯びもする。イギリス訪問の途中、スコットランドで一人で女性の怪物作りをしようとするヴィクターと別れ、クラーヴァルはアイルランドを旅行している途中で怪物に殺されるのだが、イギリスの植民地アイルランドで、インドではあるがイギリスの植民地化に加担しようとしていたクラーヴァルが殺されるという設定にも、意味が見出される。

III

メアリー・シェリーが『フランケンシュタイン』の中で、二人の重要な人物を熱烈な詩的志向を持つ者として設定し、しかも、二人が高邁な理想としてその実現に奮闘する計画が、どちらも植民地化への加担という否定的な要素をはらんでいることを描いているのはどういうことだろうか。彼女が夫パーシー、あるいは詩人一般に、何らかの危うさを感じていたのかどうかを、この作品の文言からはっきりと知ることはできない。[2]しかし、「ロマン派的」とは言えないにしても、「ロマンティック」と形容されるかも知れないほど、ある事柄を過剰に理想化し、気高さの自負に酔いしれる心情が持つ危うさを、メアリー・シェリーは鋭敏に認識し、その認識をウォルトンとクラーヴァルの人物造形を通して提示した考えることはできるだろう。

本稿第一節の二つ目の引用で既に見たように、ヴィクターも「完璧な人間は平静で穏やかな精神を常時保持するべきで、決して情熱や一時的な欲望が平静さを乱すのを許すべきではありません。知識の探求もこの規則の例外だとは思いません」と述べていて、平静で穏やかな精神を乱すほどの情熱で、知識などを探求した自らを反省している。しかし、ウォルトン、クラーヴァルを通して気高さの自負に酔いしれる心情の危うさが描かれていることを踏まえると、主人公ヴィクターについては、彼自身が反省する、穏やかな精神を乱すほどの情熱による探求の負の側面だけではなく、自らの精神や意図の気高さを疑う、というヴィクター自身ができないでいることの必要性までも、作品は描いていると考えられる。

スイスにいる家族のことを忘れるほどの情熱で怪物を作ってしまったことをヴィクターは反省するが、怪物を作ってしまった後の自分の言動について、ヴィクターはするべき反省をほとんどしないままでいる。その一つは、生命を得た怪物を放置し、それが姿を消すに任せたことへの反省のなさである。ヴィクターは後に、女性の怪物を作ることを求められた時、そうすることが怪物を作って放置した者の責任だと言われ納得するが、自分が怪物の養育を一切しなかったことの問題を、あるいは、なぜ完成した怪物を殺さずに生か

しておいたかの理由を、彼が直視し、正面から考えることはない。ヴィクターはまた、話しても気が狂っていると思われるだけだという理由から、怪物創造のことを、最後近くまで、家族や周囲の人々に決して明かすことがない。人工的に生命を生み出すことが、家族制度と根本から相容れない、ということがヴィクターが秘密を打ち明けられなかった背景として考えられるが、そうではあっても、ヴィクターが怪物創造を秘密にし続けることは、彼のintegrity（正直さ、誠実さ、高潔さ）を疑問視させるのに十分である。

部分的には反省しても、真に反省すべき、自己の高潔さの怪しさという問題を直視できないでいるのが、作品が描くヴィクターの姿だが、そういう姿が最も明瞭に浮き上がるのが、エリザベスの死のいきさつである。彼女の死のいきさつと、それを引き起こしたヴィクターの問題は、既に別の論考（「命を与えることの重み ──『フランケンシュタイン』における生と死 ──」『九州大学文学部人文学入門2　生と死の探究』）で扱ったが、ここでの議論に必須なので、いきさつだけを圧縮して説明しよう。そのきっかけはヴィクターが完成間際の女性の怪物を破壊したことにある。その時怪物とヴィクターは次のようなやりとりをする。

> ‘It is well. I go; but remember, I shall be with you on your wedding-night.’
>
> I started forward, and exclaimed, ‘Villain! Before you sign my death-warrant, be sure that you are yourself safe.’（173, Vol. 3, Ch. 3）

> 「まあいいだろう。私は去る。しかし覚えておけ、お前が結婚する晩、私はお前のもとを訪れるのだ。」
>
> 私は前へ飛び出て叫んだ。「悪党め！私の死刑執行令状に署名する前に、自分が安全であるよう気をつけろ。」

ヴィクターは「お前が結婚する晩、私はお前のもとを訪れるのだ」という怪

物の言葉を、「私の死刑執行令状に署名する前に」という応答に見られるように、その晩、ヴィクターを殺してやる、という意味だと思い込む。今まで、怪物はヴィクターの家族を殺してきていて、その後、クラーヴァルも殺すので、ヴィクターは怪物が危害を加えようとする対象には、彼自身だけでなく、エリザベスも当然含まれると考えるべきなのに、不自然なまでに、そのことに思い至らない。結婚した日の夜も彼は、「その時突然、私が間もなく起きると予期している戦いが私の妻にとっていかに恐ろしいものになるかを思いました。そして、私の敵がどこにいるかについてのいくらかの知識を得るまで彼女と合流しない決意をして」(198-99, Vol. III, Ch. VI)、エリザベスを寝室に一人で下がらせるという、最もしてはいけない危険なことをする。彼は寝室から悲鳴が聞こえて初めて、全ての真実が分かった、などと述べる。

ヴィクターがエリザベスを怪物に殺させる理由には、怪物と対決して怪物をピストルで殺すのを避けた、という非利己的な理由が考えられる（この解釈の詳細は、上記の拙論「命を与えることの重み」を参照のこと)。一方、彼は自分の命を危険にさらすのを避けたという理由も考えられる。いずれにしても彼は最愛の女性であるはずのエリザベスを怪物に殺害させるという、自己矛盾、自己欺瞞に陥っている。

このようなヴィクターは、自分の姿を正しく認識していたら、自分をintegrity を備えた人間などと決して言えないのだが、その点で、ウォルトンが自分の友になってほしいと懇願した時の、ヴィクターの断りの論理は、非常に注目される。彼は友になりたいと言われるのはありがたいが、クラーヴァルやエリザベスのように、幼い頃から親しんできた人々の代わりには誰もなれないと言うのである。その理由として彼は、幼い頃、自分の高潔さを知っていた兄弟のような人は、その後何があっても、自分の高潔さを疑うようなことはないが、後からの友人は疑念をつい、抱いてしまう、ということを挙げる。

They know our infantine dispositions, which, however they may be af-

terwards modified, are never eradicated; and they can judge of our actions with more certain conclusions as to the integrity of our motives. A sister or a brother can never, unless indeed such symptoms have been shown early, suspect the other of fraud or false dealing, when another friend, however strongly he may be attached, may, in spite of himself, be contemplated with suspicion.（215, Vol III, Ch. VII）

彼ら［幼い頃からの友］は、私たちの幼児の気質を知っています。その気質は、たとえ後で変容しても、根絶されることはありません。彼らは、私たちの行動について、その動機の高潔さを、より確実な結論とともに判断できます。詐欺や不正が取引のような兆候が幼い頃見られたというのでなければ、妹や弟は、他の兄弟に、詐欺や不正な取引をしているなどと疑いを抱くことは決してできません。ところが、［後でできた］友人に対しては、いかに強い愛着を抱いていても、［兄弟に対するのとは違って］疑いを持ってつい見てしまうかもしれないのです。

ヴィクターのこの言葉は、自分にはいろいろあったけれど、幼少の頃から、自分は詐欺や不正な取引には無縁で、そういう高潔な気質は根絶していなくて、クラーヴァルやエリザベスがまだ生きていたら、自分の行動の動機を、当然、高潔なものと判断してくれたはずである、ということを意味している。ヴィクターは災いをもたらした怪物作りをしても、また、エリザベスを自己欺瞞的に殺させてしまっても、心の底では、自分は高潔な人物であると固く信じ続けているのである。

*

先に見たように、ウォルトンは詩作品にも科学的野心にも、自分が天に高められるように感じる。そのように気高いものに感動して舞い上がる心情を、ウォルトンは「ロマンティック」と形容される可能性を自覚している。しか

し、『フランケンシュタイン』という作品は、そのような気高さの自負に疑問の目を向け、特にヴィクターに関しては、自らの高潔さの確信とは裏腹な彼の言動を、読者に繰り返し提示する。

ヴィクターはウォルトンやクラーヴァルのように自ら詩を作ることはないが、弁舌の才があり、怪物を作ってしまったことへの悔恨や、自らの苦しみを熱く語る。しかし、いかに自分が深く悔やんでいるか、いかに自分が激しく苦悩しているかを語る彼の雄弁さは、彼が真に反省すべきことに向き合っていないことと、苦悩の深さによって自らの言動を正当化してしまっていることとを、聞き手からも、特に自分自身からも隠してしまう作用を持つ。

そのようなヴィクターが、ウォルトンに怪物の雄弁さに丸め込まれないように警告するのは、皮肉なことである。しかし、怪物もまた、その弁舌の才によって、自分が人類から受けた仕打ちのひどさを雄弁に語って、人類に危害を加えることが、実のところ、決して正当とは言えないことを、自分自身から隠してしまう。確かに怪物は人類からひどい扱いを受けるが、彼のような生き物がいるとは知らない人類が、彼の姿をいきなり見せられたら、当然、恐怖で逃げ出すか攻撃してしまう、という人類の側に立った発想を怪物はできない。あるいは、そういう発想もできるのかも知れないが、そういう発想をしたら、人類に危害を加えられなくなるため、怪物は自らの受けた仕打ちをひたすら雄弁に語って自己の暴力を正当化しようとする。

『フランケンシュタイン』はヴィクター自身が反省する、精神の平静さを乱すほどの情熱で科学を探究することの危険を訴えていて、その危険は、探求の目的を過度に理想化する「ロマンティック」な高揚感が助長するものでもある。しかし作品は、それだけでなく、そうした高揚感が自らの高潔さを本人に確信させ、真に反省すべき自分の問題に向き合うことを不可能にしてしまう作用を描く。詩が持つ言葉の力と共通する、雄弁さが持つ力が、そうした作用を強めてしまうことも作品が繰り返し描く主題である。『フランケンシュタイン』はウォルトンが、友を求める自分の心情の熱烈さを「ロマンティック」だと見なされることを危惧したり、自分を「ロマンティック」だ

と軽蔑しない分別を持つ友を持ちたいと願ったりする様子の描写とともに始まるが、感動すると天に高められるように感じる彼の高揚感と高潔さの自負は、作品が全体を通して、それがはらむ危険と問題を浮き彫りにしようとするものである。

注

*　本稿は2021年８月18日から25日にかけてネット上に発表原稿を掲示し、メールで質疑応答をする形態で開催された、九州山口イギリス・ロマン派文学研究会・夏季研究発表会における、発表原稿に加筆修正を施したものである。研究発表会において、質問、示唆をお寄せくださった会員の方々への感謝の意をここに記したい。

1　本稿では1831年の改訂版に基づく Penguin 版のテキストをもとに考察をしているが、1818年の初版は、Norton 版で見ることができる。

2　Peter Dale Scott は、メアリーの夫パーシーとクラーヴァルの関連について、メアリーが、パーシーの社会制度や結婚のあり方についての理想に共感しつつも、それがそれにもかかわらずはらむ男性性を重視した不均衡さを感じていて、そのマイナス面をヴィクターに投影し、パーシーの不均衡さを是正した理想的な姿をクラーヴァルに投影している、という解釈を提示している。

文献表

Scott, Dale Peter. “Vital Artifice: Mary, Percy, and the Psychopolitical Integrity of *Frankenstein*.” George Levine and U. C. Knoepflmacher eds. *The Endurance of* Frankenstein*: Essays on Mary Shelley’s Novel*. University of California Press, 1974. pp. 172-202.

Shelley, Mary. *Frankenstein or the Modern Prometheus*. Maurice Hindle ed. Penguin, 2003.

———. *Frankenstein or the Modern Prometheus: The 1818 Text, Contexts, Criticism*. 2nd ed. J. Paul Hunter ed. Norton, 2012.

鵜飼信光「命を与えることの重み ──『フランケンシュタイン』における生と死 ──」『九州大学文学部人文学入門２　生と死の探究』飯嶋秀治、片岡啓、清水和裕編、九州大学出版会、2013年、137～149頁